

障害者・高齢者と対話のこぼ

講演者



市川 薫 氏（早稲田大学 人間科学部）

1964 慶大工電気卒、日立中研、千葉大を経て、現在早大人間科学学術院教授・応用脳科学研究所員、京都工繊大特任教授。工学博士、千葉大名誉教授。信学会や人工知能学会の理事などを歴任。対話言語、情報福祉などに関心を持つ。信学会論文賞、総務大臣表彰など受賞。著書に、“対話のこぼの科学—プロソディが支えるコミュニケーション—”（早稲田大学出版部、2011），“福祉と情報技術” 共著、（オーム社、2006），“人と人をつなぐ声・手話・指点字”（岩波書店、2001），“情報福祉の基礎知識” 編著（ジエース教育新社）など。

概要

東日本大震災や阪神大震災などでは、発災時や避難後の生活時ともに、障害者や高齢者への情報伝達に大きな課題が残されている。伝達通信システムと、言語インタフェースの両面に、である。ここでは主に後者に焦点を当ててみよう。

現状の情報保障技術は障害者にとって心的負担の大きいものが多い。例えば、視覚障害者は、文字に固定されている（不揮発性）情報を、直ぐに消え去る（揮発性）音声に変換して聞かなければならない。そこでは、注意深く聞き落とさないようにし、記憶に固定化していかなければならない。このように考えると、支援技術は、巷に言われている「アクセシビリティ」だけでは不足で、心的負担のより軽い「ユーザビリティ」への配慮が不可欠である。

障害者への情報保障に関しては、「情報アクセス権」や「情報発信権」が国際的に基本的人権として示されている。しかしそれだけでなく、意思決定の場に実時間で参加出来ることも、重要な権利ではないかと考える。当然そこでは実時間対話を可能とする支援が求められる。ひるがえって、障害のない人々は、日常殆ど意識することなく母語を気楽に使って対話を行なっている。母語による音声対話の心的負担が軽いのは何故か。そのことを参考に、コミュニケーション障害支援の今後の方向を探ることも重要であろう。障害者などにとっての支援技術は、その意味でも基本的には対話形式が望ましいだろう。

心的負担が軽いが故に見落とされていると思われる対話言語の性質、特に言語理解の認知面を、動態論的視点から考察する。その性質が母語話者の対話にどのように表れるかを、留学生（非母語話者）の対話との対比を通して検討する。また、誰がどのような体調や感情で話しているかも、相手の発話を理解する上で欠かせない。

このような視点に基づき、音声（聴覚言語）と同じく対話言語である聴覚障害者のための視覚言語である手話や、盲ろう者のための触覚言語である指点字にも言及する。さらに、Web が現在では障害者や高齢者にとっても大きな情報源であり、その方々の利用に対しての配慮も、JIS などの内外の規格にある程度はなされてはいるものの、実効上不十分な点があることを指摘し、Web と障害者の対話と看做すことを提案、その課題なども問題提起したい。